

夏草「おくのほそ道」から ① 「冒頭」

月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅はくたい くわかく

人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて

老いを迎ふる者は日々旅にして旅をすみかとする。

※古人 李白・杜甫・西行・宗祇など人生の大半を旅に過ししながら詩歌の道を究めた人

古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年より

か片雲の風にさそはれて、漂白の思ひやまず、海

※江上の破屋 江戸深川(今の東京都江東区)の西部にあった芭蕉の家

浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の

古巢をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞のかすみ

※そぞろ神 人の心を誘惑し、落ち着かせない神

空に、白川の関越えむと、そぞろ神の物につきて

※道祖神 道行く人の安全を守る神

心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの

手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付かへて、かき

※三里 膝の頭の下部外側(くぼんだ所)ここに灸をすえると足を丈夫にするといわれる

三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、

※杉風 芭蕉の弟子の一人の杉山杉風の

住めるかたは人に譲り、杉風が別荘に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家ひな

※面八句 俳諧の連句百句を二つ折りにした横紙四枚に書く時一枚目の表側に記す八句

面八句を庵の柱に懸け置く。

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取って

老年を迎える馬子などは、毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。

(風雅の道に生涯をささげた)昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多い。私もいつの頃からか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出たい気持ちが動いてやまず、

(近年はあちこちの)海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに(帰り)、蜘蛛の

古巢を払って(住んでいるうちに)、しだいに年も暮れ、新春ともなると、霞の

立ちこめる空の下で白河の関を越えたいものだと、そぞろ神が乗り移って

ただもうそわそわとさせられ、道祖神が招いているようで、何も

手につかないほどに落ち着かず、股引の破れたところを繕い、道中笠のひもを付け替え、

三里に灸をすえる(など旅の支度にかかる)ともう、松島の月(の美しさは)と、そんなことがまず気になって、

今まで住んでいた庵は人に譲り、杉風の別荘に移ったのだが、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家(元の草庵にも、新しい住人が越してきて、私の住んでいた頃のわびしきとは違って変わり、華やかに雛人形などを飾っている。)

面八句を、(門出の記念に)庵の柱に掛けておいた。

夏草「おくのほそ道」から ② 「平泉」

※三代の栄耀 昔この地方に勢力を誇った藤原氏三代に渡った栄華

ええう ※一睡のうちにはがなくな消え果て

だもん

※一里ごなたに 一里(約三・九里)ほど手前に

ひでひら

でんや

きん

里ごなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金

※金鶏山 秀衡が富士山の形に似せて作らせ ※高館 源経の築いた城塞

けいざん 山頂に金鶏を埋めたと伝えられる山 たかだち 義経が自害した地 きたかみ

鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、北上

川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城

ころも いづみ じょう

をめぐりて、高館の下にて、大河に落ち入る。

たかだち

やすひら

ころも

せき

泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさ

※異 異民族

※義臣すぐつて 義経が自分

えぞ

に忠義を尽くす家臣

を連れて

し固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつ

てこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。「国

破れて山河あり。城春にして草青みたり」と笠打

※時のうつるまで 時が過ぎていくのを

忘れるくらい長い時間

ち敷きて、時のうつるまで涙を落しはべりぬ。

つはもの

夏草や 兵どもが夢の跡

※兼房

十郎権頭兼房、義経の家臣で、高

齢でありながら最後まで戦い、討

ち死にしたとされる武将

う

かねいさ

しらが

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

そら

曾良

藤原清衡・基衡・秀衡と続いた奥州藤原氏三代の栄光も、はがなくな消え果て、南大門の跡はここから

すぐ一里ほど手前にある。秀衡の館の跡は田野となり、その名残すら無い。

ただ、金鶏山だけが、形を残している。まず義経の館のあった高館に登ると、南部地方から流れる北上

川が一望できる。衣川は秀衡の三男和泉三郎の城跡

をめぐって、高館の下で北上川と合流している。

泰衡の城跡は、衣が関を境として平泉と南部地方を堅く守り、

蝦夷の攻撃を防ぐ形に見える。それにしてもまあ、義経の忠臣たちが

この高館にこもった、その功名も一時のことでは今は草むらとなっているのだ。

国は滅びて跡形もなくなり、山河だけが昔のままの姿で流れている、栄えた都の名残もなく、春の草が青々と繁っている。「

杜甫の詩を思い出し、そのように感慨にふけた。

そして、笠を敷いて腰を下ろし、時の過ぎるのを忘れて涙を落とした。

夏草や 兵どもが 夢の跡(奥州藤原氏や義経主従の功名も、今は一炊の夢と消え、夏草が茫々と繁っている。)

卯の花に 兼房見ゆる 白髪かな 曾良(白い卯の花を見ていると、それは勇猛に戦った義経の家臣、兼房の白髪のようにだ)

夏草「おくのほそ道」から ③ 「平泉」

※二堂 中尊寺の経堂と光堂

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。

※三将・三代 清衡・基衡・秀衡のこと。ひかりだう

経堂は三将の像を残し、光堂は三代

の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝

散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱

霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の草むら

となるべきを、四面新たに囲みて、葺

を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の

記念とはなれり。

かたみ

さみだれ

五月雨の降り残してや光堂

五月雨の降り残してや光堂

以前から聞いて驚いていた中尊寺の二堂が開帳していた。

経堂には、三代の將軍たちの像を残していて、光堂にはその三代の

棺を納め、ほかに三尊の仏像を安置している。かつて美しく輝いていた七宝は

散り失せ、珠玉で飾った扉は風で破れ、金箔の柱は

霜や雪のために朽ちてしまい、すんでのところで廢墟の草むらと

なるはずのところを、後世の人が四方を新しく囲み、屋根瓦で

覆って、風雨を凌いでいる。そのおかげで、しばらくは千年の昔をしのぶことのできる

記念として残ることになったのである。

五月雨の降り残してや光堂

(五月雨も、この光堂だけは降り残したのであろうか。こんなに美しく光り輝いているのだから。)